

人と魚と海のネットワーク
香川県漁連ホームページ
http://seaclub.power.co.jp/
E-mail:gyoren@power.co.jp



JF 高松市北浜町 8 - 25
TEL 087-825-0350
FAX 087-851-0699
J F 香川漁連

平成 14 年度 ノリ採苗作業順調!!

今夏も猛暑となり、海水温は平年に比較してやや高めから著しく高めに経過し、9月中旬になっても海水温は27度を切らなかった為、採苗開始の延期も検討された。

9月中旬になり、平年に比較しやや高めながら海水温が徐々に低下した為、多度津のり種苗センターでは、9月25日より、志度採苗場では10月5日より、予定通りの採苗業務が開始された。本年度の採苗枚数は、4万4千反を予定している。

10月8日の栄養塩調査では、栄養塩の値は県全域で平年並みから平年よりやや高めという結果が出ている。

今後、順調に水温が低下し、育苗、本張りがスムーズに行われ豊作になることを期待したい。



ノリの採苗作業

と健康を考えるシンポジウム」を開催。県産農林水産物などを紹介するパネル展示会も行い、450人が参加した。

香川県知事は、「健康作りを推進するためにも、県内産をバランスよく食べる地産地消の取り組みを推進しよう」と推進会議を核とする運動の旗振り役を自認する。また、県内産の農林水産物の良さを見直し、地産地消の推進に役立てようとシンポジウムでは、各方面から出席したパネリストが地元産の積極活用を呼び掛けた。

高松青果の行天統一常務は「温暖な香川県は一年中が旬。その立地を生かし、Kブランドを軸に地産地消を進めよう」と提案。安定供給の態勢づくりと「安全・安心」をより明確にする点検の仕組みが必要と指摘した。

香川漁連の松田勝成購買事業部長は「瀬戸内海の豊富な旬の魚を、今まで以上に地元へ供給したい」と話した。

満濃町の農業士、馬場敏江さんは、仲間と特産化に取り組むヤ・コンの栽培・加工の経験を報告。外観からでなく、地場のヤ・コンでお腹の中から美人になろう」と語り、会場を沸かせた。



地産地消運動への参加を呼び掛けたパネリスト

みんなで地産地消を考えよう!

「食と健康を考えるシンポジウム」

温暖な立地を生かせ パネリストが訴え

香川県の地産地消運動を推進し、健康で豊かな食生活を実施する取り組みを担う「かがわ地産地消運動推進会議」の設立総会が10月4日開催された。県と生産者、流通、加工業者、消費者に至る関係機関が一致協力して運動の推進を図ることを決めた。活動の第一弾として同日、高松市の県民ホ-ルで「食

サワラ資源の回復に向けて 大漁旗を再び

平成 14 年度香川県青壮年女性漁業者活動実績発表大会で県知事賞を受賞した「サワラ資源の回復に向けて 大漁旗を再び」女木さわら流せ組合浜崎克彦氏の発表内容の概要は次のとおりです。

1. 活動の内容

1) 資源回復への取り組み

香川県さわら流しさし網協議会は、種苗放流によって、資源の早期回復を図りたいという考え、日本栽培漁業協会にサワラの種苗生産の再開を要望した結果、平成 10 年度は試験的に、平成 11 年度からは本格的に技術開発事業が実施されることになりました。

サワラ資源の状況が非常に悪い中で栽培漁業を推進するためには、私たち漁業者や県関係者の全面的な協力が必要とのことでした。そこで、私たちは、受精卵の確保や種苗放流、放流効果調査に協力するとともに、受精卵放流や中間育成に取り組みました。

受精卵確保への協力と受精卵放流

私たちは、春の漁期中に親サワラの漁獲状況を各地区の代表者が取りまとめて県の担当者に毎日報告すること、採卵できそうな親魚が獲れはじめると、県の船が漁場に出て、各漁船と連絡を取りながら、サワラのオスとメスを引き取り、人工授精を行うこと、などが決まりました。また、県の船がすべてに対応できない場合は、漁業者が自分たちで人工授精を試みることにしました。

中間育成の実施

平成 11 年からは、築堤式の中間育成場や大型小割を使った、中間育成技術開発事業がスタートしました。中間育成後の放流式には、私たち漁業関係者も多数参加して、15cm 近くに育ったサワラを見て、放流の効果に大きな期待を持ちました。しかし、日裁協での種苗生産が順調で、種苗が大量に生産されても、施設の収容量などから、全部を中間育成するのは難しいということでした。そこで、平成 12 年から、県下で漁業者のグループ活動として中間育成が開始されました。

平成 12 年には 1 ヶ所、平成 13 年には 2 ヶ所、平成 14 年には 3 ヶ所で実施され、私たちの女木漁協は、平成 13 年と 14 年の 2 回、中間育成に取り組みました。

最初に県の人から毎日の給餌量の目安表をもらい、これを参考にして、毎日の当番を決め、その日の魚の状態は飼育日誌に気づいたことを記入して、次の人に引き継ぐことにしました。途中、県の人でも何回か様子を見に来てくれましたし、私たち役員は、時間の空いている時には、極力、小割へ出かけたり日誌を見て、何か変わったことがあると、県の人に連絡して相談しました。

初めて行った平成 13 年には、種苗生産時に栄養疾患があったようで、輸送時や収容直後にへい死が見られ、心配しましたが、何とか目標サイズ

の種苗まで育成することができました。平成 14 年の種苗は、最初から摂餌も活発で、非常に良い成績を収めることができました。後で聞くと、育成歩留まりは、2 年とも、県内では最も良い結果だったようです。このことは、これまでの青年部活動などで行ってきた経験が生かされたと思いますし、グループ全員がサワラへの情熱を持って、協力した成果だと考えています。

種苗放流・放流効果調査への協力

採卵や中間育成の他に、日裁協や県の中間育成後の放流の時には、役員を始め、なるべく多くのメンバーが、作業や式典に参加してきました。特に平成 10 年の日裁協での最初の放流の時には、屋島事業場でバケツリレーによる放流に全員が参加し、早く大きくなって帰ってくるように期待を込めて、放流をおこないました。

また、日裁協や水産試験場では、放流効果を調べるため、標識放流や放流魚の追跡調査に協力するため、夏場に操業しているマナガツオ流し刺し網で混獲したサゴシがあれば、極力、水産試験場に届け、その調査結果から、私たちのところで中間育成されたと思われるサワラも、何尾かが確認されました。

さらに、平成 13 年には、標識技術開発のため、ハマチ養殖用の 10m 小割を使った継続飼育試験に、約 4 ヶ月ほど取り組みました。途中、病気や傷などがももて、死んだものもありますが、約 1Kg 程度まで育ったサワラを見て、グループの皆も、成長の速さにあらためて感心するとともに、放流した稚魚も立派に育ってしてくれるはずだという思いを強くしました。

2) 資源管理の実践

秋漁期の休漁

サワラ資源の回復のためには、放流事業と同時に、効果的な資源管理を行う必要があります。県の協議会での何回かの話し合いの結果、香川県では種苗放流が開始された平成 10 年度からは、秋のサゴシ漁を全面的に休漁しようということに決まりました。地区によっては、経営への影響が大きく、いろいろな意見が出されましたが、結果としては、サゴシの獲りすぎが資源の減少をまねいた大きな原因であろうと皆が感じていましたので、まず、香川県で積極的な取り組みを開始し、他の関係県にも協力を呼びかけていくことになりました。私たちの組合でも、現状の漁獲状況を見ると、やむを得ない選択だろうということ得意

見がまとまり、継続して実践しています。

春漁期の目合いの拡大

秋のサゴシだけでなく、春漁期に獲れるサゴシも問題ではないかという声も出されました。我々漁業者は、どのくらいの目合いを使えば、どの程度の大きさのサワラがかかりやすいかということ、大体は知っています。これまでは、漁場に入ってきたサワラの大きさに合わせていろいろな目合いの網を組み合わせるなどして、少しでも多くのサワラを獲る工夫をしてきました。

しかし、水産試験場の調査で、資源量の減少とともに同じ年齢のサワラでも以前よりも成長が速くなっていることや、網の目合いと漁獲物の大きさとの関係などの報告があり、春漁期でも未成熟のサゴシをなるべく獲らないようにしてやる必要を感じました。

漁場の実態や操業の実態が地区ごとに違っているため、全県で統一した取り組みはスタートできませんでしたが、平成 10 年から播磨灘地区では新網の購入は 4 寸目以上にしていくという方向が出されました。私たちの高松地区サワラ流しさし網協議会では、3 年間ですべての網を 3 寸 8 分以上に切り替えようということで話がまとまりました。

2. 活動の成果

放流事業や資源管理の取り組みは、私たちが単独で取り組んでいる内容ではありませんが、県内の活動に積極的に参加し、他府県での協力も得られるようになったおかげで、サワラの漁獲量は、年々少しずつですが増加傾向にあるようです。水産試験場で調査した最近の漁獲量を見ると、県内漁獲量は毎年 3 割から 5 割程度の増加傾向となっています。残念ながら、今年度は、備讃瀬戸へサワラの入込みが少なかったのか、高松地区での漁獲量は、あまり伸びませんでした。全体としては漁獲が増えていることから、確実に資源量は増加しているのだと思います。

女木サワラ組合としては、中間育成に取り組んで、全員が餌やり、網替え、放流などの作業に参加したことで、サワラへの思いが深まり、もう少し我慢をしてもサワラ資源の回復を目指そうという意味の統一が一層強化されたことも、大きな成果だろうと考えています。

3. 今後の展望

先にも述べたように、ここ数年、漁獲量は若干

増加傾向にはありますが、さわら流しさし網の経営を考えると、収益に結びつくようなレベルに至っておらず、早急な資源回復が望まれるところで

す。 私たちも、できる限りの努力を続けていきたいと考えていますが、国や県あるいは他府県の漁業者との情報交換や話し合いの中で、一層効果的な管理が進められ、瀬戸内全体の資源量が回復することを願っています。

全国漁協学校15年度学生募集

全国漁業協同組合学校（千葉県柏市）では平成 15 年度（第 64 期）学生募集を下記の要領で行っています。

1 募集人員

50 名（男女共学）

2 応募資格

1 力年以上漁業に従事か漁協団体に勤務中の者
高卒（見込者を含）か同等以上の者、のいずれか。
ただし、原則として漁協系統団体の推薦が要。

3 応募締切期日

平成 15 年 1 月 17 日（金）

4 応募先

出身地域の漁（指）連会長宛

5 入学選考料

3 万円

6 応募書類

入学願書、成績証明書、健康診断書、推薦書（系統団体）

7 選考

平成 15 年 2 月 14 日（金）午前 10 時～応募書類提出の連合会で書類審査、学科試験（小論文）面接を行う。

8 入学発表

平成 15 年 2 月 21 日（金）

9 問合せ

同校

0471(44)8125